
一人の人生は楽しいか？

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人の人生は楽しいか？

【Nコード】

N0835L

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

人間一人でも生ける。

そう思っていた時が僕にもあった。

日が沈みはじめ、茜色に染まる空。

その光が教室ごと彼女を赤く照らす。

僕は見惚れていたのだろうか、美しく、儚げに、孤高にたたずむ彼女に。

僕の方なんて見向きもしない彼女は、黒く長い髪をなびかせ、こう言った。

「私の人生に他人は要らない」

その言葉には一切の感情は込められていなかったけど、僕にはそれが寂しく思えた。

「なあ、友達は積極的に作ろうとした方がいいぞ」

隣を松葉杖を突きながら歩く高峰が言う。

「どうした、いきなり」

高校入学式当日。

今日から晴れて高校生と成るわけだが、正直実感はあまりない。少々サイズを間違えた感のあるぶかぶかで無駄に新しい制服が一層、そう思わせる。

入学式はまだ始まっておらず、僕らは鯉が泳いでいる池の前辺りにいる。

緊張のためか集合時間より少し、というかなんかなり早めに来すぎてし

まったくため控えの教室にも入れず、ぼーとしていたところに現れた高峰を連れ校内をうろろしたり雑談したりして時間を潰すことにしたのである。

「んー、なんとなく思っただけ。なんかお前、話すタイミングが掴めないとか言ってたんだかんだ孤立しそうじゃん。休み時間の間ボーとして、授業が終わったら周りがワイワイしてる中一人でそくさ下校。それは一生に一度の高校生活にしてはあまりにも寂しいと思わないか？」

長々と高峰が喋っているのを池の鯉を見ながら「ふーん」と聞いていた。

確かに人見知りではあるけど、小中のときも話をしたり遊んだりする相手ぐらいいいたし、あんまり張り切りすぎるのもどうだろうと思う。高校デビューってよく聞くけど失敗したらかなりキツイ気がする。

人間関係って、第一印象で決まるのも多いだろうし、変に目立ったりするのは、僕としては好ましくない。

他人の視線を気にするぐらいなら、いつそ誰とも関わらずにいた方が遥かに楽で、生きやすい。

「別に友達ができなかったらできなかったでいいんじゃない？今の世の中、人間一人でも生きていけるようになってるんだし」

「まあ、お前がそれでいいなら別にいいけどな。後悔だけはするなよ、あの時あしたら良かった、とか言っても手遅れなんだからな」高峰はどこか懐かしげに、寂しげに、そして悔しげに、どこに焦点を合わせるでもない目を地に向けて語る。

一度流れた時間は取り戻せない。

何があってもそれだけは変わらないこの世の摂理。

ありきたりな言葉だが、それを誰よりも良く知っている高峰の言葉だからこそとても深く重く思える。

夢を一途に目指し、ほんのちよつとの躊躇いで全てを失った一人の男の助言であり忠告なのだろう。

そんなことがあったからだろうか、僕は彼女に声をかけていた。
それは偶々だった。

入学式の後、クラス発表、担任やクラスメイトとの顔合わせ、今後の説明等々を済まし、いざ帰ろうという所で忘れ物を思い出した。時刻も既に夕方。明日にしようかとも思ったのだが、せっかく思い出したのだからと回れ右をして取りに戻ることにした。
そんな途中だった。

校舎内の地理も曖昧にしかわからない僕は、二階に行ったり、三階に行ったり、教室に入ったり出たりを繰り返した。
やっぱ今日は帰ろうか、そう思い始めた最中だった。

何の気も無く、何となく目をやった先に――彼女はいた。

彼女は誰もいない教室の隅で何をするでもなく、ただ机に腰を掛け窓の外を見ている。

それは単なる好奇心だったのかもしれない。

無意識に惹かれたのかもしれない。

それ以外の何かかもしれない。

「なにしてるの？」

気がつくと、僕の口は、その言葉を発していた。

人見知りの僕が初対面、しかも女子相手に躊躇なく話しかけるなど奇跡でも起きない限りありえない。

そう思っていた。

誰かに意味も無く話しかける事自体、高峰を除けばいつぶりかもわからない。

言った後、僕の体は急に緊張し始める。

心臓がバクバク言ってるのがよく分かる。

返答が返ってくるのを待つて——のどを鳴らした。
だが待つてもいつこうに返事はない。
静寂が続く。

「あ、あの……」

やがて不安が緊張を上回り、震えるような声で、僕は何かを言おうとするが、緊張と不安で言葉がうまく紡がれない。

何に対する不安なのかは僕にはわからない。でも不安だった。

そして何を言おうとしたのかも、僕にはわからない。

それぐらい僕の頭は真っ白だった。

やっぱり先程のは奇跡だったのだろう。

それが、言葉を発したというのは気のせいだったのかもしれない。

そらなら僕が気づかなかったのも、彼女が何の反応もしないのも納得できる。

うん、そうだ。それしかない。

自分の中でこの不可解な現象に対する見解を半ば強引に出し、その場から去ろうとした。

が——

「なにか用？」

既に背中を向けていた僕の後から声がして、足を止めた。体の動きも、思考回路も止まった。

ただ心臓だけが動きを活性化していた。

「え、えつと……」

ぎこちない動きで首を彼女に向け、依然うまく動かない口で何かを言おうとする。

対する彼女は先程と寸分変わらない姿勢で外を見ていて、僕には見向きもしない。

「用がないのなら帰って。一人で居たいの」

彼女は再び声を発し

「……………」

再び彼女は沈黙に戻った。

「ま、また明日……………」

居づらくなつた僕は逃げるように、その場を後にした。

ちなみに忘れ物の存在を思い出したのは寝る直前のことだった。

もつとも、冷静に似考えてみると、入学式前に高峰に無理矢理押し付けられた僕としては特に必要のない物だったし、無くなつても問題はなかったため、僕は気にしないことにした。

翌日、高峰の案内により教室にたどり着いた僕の目が真っ先に捉えたのは、教室の隅に座る昨日出会った彼女だった。

ただ昨日とは違って、机ではなく椅子に座り、外ではなく本を見ている。

（同じクラスだったのか…………）

と言うのが、僕の正直な感想。

昨日もこの教室で一度クラスメイトとは顔合わせはしたはずだが、放課後に遭った時は全く気づかなかった。

彼女の席は、僕の真後ろであるにも関わらずだ。

もしかしたら、放課後に遭っていなければ、今も彼女を気に留めなかったかも知れない。

それぐらい彼女は目立たない存在だった。

クラスの面々は入学したてでまだぎこちなさはあるものの、元からの知り合いや昨日の今日で早速仲良くなつてる者達で騒がしかったりする。

でもそんな中、一人で居る彼女は浮いているどこるかむしろ溶け込んでいて希薄だった。

誰とも喋らず、誰にも関わらず。

さながら空気の様に。

そんな彼女に僕は声をかけるなんて出来ず、ただ授業が始まるのを待った。

時は流れ、再び放課後。

それまでの間、彼女は誰とも話す気配も、関わる仕草も全く感じさせることなく、ただ椅子に腰をかけていた。

(……まあ、僕も誰とも喋ってはいなかったけど)

まだ部活動に参加している者もおらず、補習なんてモノもないので、一年は授業が終わると大体がすぐに帰宅する。

現に、終礼が終わって三十分程経つこの教室には、僕と彼女——鷺津さんしか居ない。

相変わらず本を読む彼女を背に、僕は何をするでもなく窓の外を見る。昨日の彼女を真似るように。

まあ、僕の席からは桜が散る様が見えるだけだけど。一枚二枚と花びらを数えるぐらいしかする事がない。

そして、桜の花びらが三百程散るのを数えた頃、僕は背中を回し、意を決して彼女に話しかけた。

「な、何を読んでのの？」

今回は落ち着く時間が有ったためか、言葉を喋る事はできた。心臓は、ばくばくだけど。

「……………」

無反応。

沈黙が辛い。

彼女を見つめる僕。

本を見る彼女。

教室は、いやに静かで心臓の音がよく響く。

やがて、いたたまれなくなつた僕は「また明日」と言葉を残し教室を去ってしつた。

翌日。

「お勧めの本とかある？」

「……………」

再び放課後を待ちリトライを試みた。

が、結果はやはり沈黙。

うーん、困った。

会話が續かない以前に、成り立たない。

キャッチボールをしようにも、グローブをはめてくれないみたいなき感じ。

結局この日も、彼女の声を聞く事なく「また明日」をして終わりだった。

「どうしよう、話すネタが思いつかない」

あれから放課後に彼女に話しかけること一週間。
依然手応えは無い。

まあ、緊張はしないようには成ったけど。

「そろそろ鬱陶しいんだけど」

「……………えっ？」

「毎日毎日…………」

彼女はパタンと本を閉じ、僕を見る。

初めて見た彼女の目は、美しかったけど、暗かった。

「私は一人で居たいからここに居るの」

「でも…………」

この一週間、ずっと考えていた。

どうして僕は彼女に話しかけるのだろう、と。

そして、今も答えは出ない。

でも、なんとなく気になるのだ。

「お願いだからもう……話しかけないで！」

彼女は言うと立ち上がり、それに合わせるように、黒く長い髪が大きく揺れる。そして、淡々と歩みを進め、教室の戸を静かに開ける。「人は一人でも生きていける。ううん、一人でしか生きていけないの」

「鷺津さん……」

背を向けて語る彼女に何も言うことが出来なかった。

それは、前みたいに緊張していた訳ではない。彼女に吞まれたのだ。

「……で、何でまた居るの？」

「駄目？」

「いや、普通こないでしょ……」

次の日の放課後、僕はまた凝りもせず教室に居た。

高峰と話をしていたせいで少し遅くなったけど。

ただ今日は本ではなく初めて会ったときのように外を見ていた。

「なんとなく」

そう、なんとなく。

僕が今、鷺津さんの前に立っている理由はそれだけだ。

なんとなく気になるから、なんとなく仲良くなりたいから。

それでは駄目だろうか。

「私の人生に他人は要らない」

僕の方見ず外を見つめたまま彼女は言った。

「た、確かに一人でも生きていけるけどさ、一人でしか生きていけないなんてこともないんじゃないかな。むしろ生きることしかできない。他人と関わることで思い出とか生きがいとか出来るんじゃないかな。嫌なこともあるけど……」

自分で言って余計なお世話だと思う。

一体自分は何様なんだろうと。

僕も他人とはあまり関わりたくない、そう思っていたはずなのに。

彼女の背中に寂しさが見えた気がしたから……

彼女は無感情なんかじゃなく、ただ感情を押し殺しているだけ、そ

う感じたから……

「……余計なお世話」

彼女は外を見たまま、ぼつりと呟くと、いつもの様に黙った。

「また明日」

僕は背中越しに、毎日欠かさず伝えてきた言葉を彼女に渡し、教室を去った。

翌日、ホームルームの時間になっても彼女の席は空席だった。

高校に行く気なんてなかった。

勉強をするなら自分で参考書なりを買ってすればいい。

それを半ば、いやほとんど無理やり入学させられた。

しかもサボるなという忠告つきで。

まあ、サボっても他にすることも無い上に、ばれると面倒な気がする
るので、仕方なく一応通うことにはした。

そう、一応。

授業が終わればさっさと帰ればいい。

誰とも関わるつもりはない。

そのつもりだった。

登校初日、入学式や面倒な先生の話を済まし、下校の時間になると私はクラスメイトが教室から去るのを待った。

理由は簡単。騒がしいのが嫌いだからだ。

だから、あらかた帰って静かに成ってから私は帰る事にした。

「そろそろ帰るか……ん？」

教室に誰もいなくなったので、帰ろうかなと思ったところで、自分の前の机に一冊の雑誌が置いてあるのに気づいた。

私は席を立ち、その雑誌を手取る。

『心機一転、イメチェンして高校デビュー』

「……………」

雑誌の表紙に大きく書かれた文字を見て私は思わずにいられなかった。こんな雑誌を読んでる時点でそのデビューは失敗してるのではないかと。

「まあ、暇つぶしぐらいにはなるか」

早く帰っても、本を読むか寝るぐらいしかすることはないので、のんびりしても損はないだろう。

私は、面倒だったのでそのまま腰を下ろし、机に座る。

明日からは本を持ってこよう。休み時間とか退屈そうだし。

窓に体を向け、外を見下ろす。

誰もいない。

もうみんな帰ったのだろう。

そう思っていると、後から急に声がしたので思わず驚いた。

私は、相手に驚いたことを悟られないように振り返らず外を見続けた。

そして、放っておけばどこに行くだろうと、相手が去るのを待った。

だけど、いくら待っても動く気配はしない。

もしかしたら、気づかない内に去ったのではないかと思い、振り返

ろうとすると――

「あ、あの……」

と弱々しい声が聞こえた。

どうやら緊張していただけたようだ。

緊張するくらいなら話しかけなければいいのに。

何か用でもあるのだろうか。

例えば、私が今持っている雑誌がこいつので、返して欲しいとか。それなら納得出来る。

「……何か用？」

なんとか冷静に話しかけられた……と思う。

正直言つと、私もかなり緊張していた。

なんせ初対面の人と話すなんて久しぶりだったから。

「えつと……」

そいつは何かを言いよどむ。

「用がないのなら帰つて、一人で居たいの」

私がそう言つと、少々間をおいて男は離れていった。

ほつと心の中で胸を撫で下ろす。

すると――

「ま、また明日……！」

そんなことを言葉を残して、そいつは教室を去っていった。

その言葉に私は思わず振り返ってしまった。

今あいつは何て言つた？

「また明日？ 私に？」

今までそんなことを言う奴なんていなかった。

私はずっと一人だった。

今まで一人で生きてきた。そしてこれからもそのつもりだった。

だと言つのに――『また明日』顔も知らない男から言われたその一

言で、私は揺れていた。

何でもない。何ともない。

そう自分に言い聞かせるように勢いよく立ち上がり、私はずっと手

に持っていた、そしていつの間にか皺が出来ていた雑誌を自分の机に仕舞い、教室を出た。
その日、私は寝れなかった。

次の日、無駄に騒がしい教室にたどり着くと、私は自分の席に座り、本を鞆から取り出した。
本は便利だ。

自分と他人の壁を意識的に作り出すことが出来る。
私は他人に興味が無い。周りにいるクラスメイトも、私からしたら雑音でしかない。

なのに、何故か私の目は本ではなく、ある生徒を捕らえていた。
昨日会ったあいつ。

顔も見えていないくせに、そう直感が告げる。

放課後になると、そいつがまた現れた。
名前は確か……忘れた。

そもそも覚える必要がない。

私は他人と関わるつもりなんてないのだから。だからそいつが話しかけてきても無視した。

その次も、そのまた次の放課後も。

鬱陶しかった。

何故こいつは私にこうも関わろうとするのだろう。

「そろそろ鬱陶しいんだけど」

一週間ほど無視を決め込んでみたが、どうやら無駄のようなので明

らめて声をかけることにした。
前のような緊張感はない。

「毎日毎日……私は一人で居たいからここに居るの」
本音を素直に伝えたはずなのに、言ってから疑問を覚えた。
どうして私はわざわざ教室に残っているのだろう。

一人になりたいのなら家に帰ればいいだろうし、最初はそうするつもりだった。

なのにどうしてだろう。頭がこんがらがってきた。

「お願いだからもう……話しかけないで！」
酷く苛々する。

他人なんてどうでも良かったはずなのに、どうしてこいつこんなに
も私を惑わせるのだろう。

「人は一人でも生きていける。ううん、一人でしか生きていけない
の」

相手ではなく自分に言い聞かせるよう呟き、私は教室を出た。

次の日、放課後になっても私しか居なかった。

あいつはいない。私が望んだ通りに。

人間死ぬときは誰も一人、他人なんて必要ない。

だれかと仲良くなっても意味なんてない。

いつかそいつもいなくなる。

私をこの学校に入学させた奴は友達を作れなんていつていたけど、
そんな気さらさらない。友達なんて作っても弱くなるだけだ。

現にあいつがいなくなつて清々してるはずなのに、なんだか心が晴
れない。

ちよつと一緒にいただけなのに、私はあいつが気になってしょうが
なかった。

私は気がつけば窓を見ていた。初めてあいつと出会った時のように。

そしてあの時と同じように現れたのだ、こないはずのあいつが。
どうしてこいつは私の前に現れるんだ？

どうして私に話しかけるんだ？

いくら考えてもわからなかった。

だから尋ねてみた。そして、こいつは

「なんとなく」

そう言ったのだ。

「私の人生に他人は要らない」

そう、必要ない。なんとなくなんかで私の人生に踏み込んで来ないで欲しい。

「た、確かに一人でも生きていけるけどさ、一人でしか生きていけないなんてこともないんじゃないかな。むしろ生きることしかできない。他人と関わることで思い出とか生きがいとかが出来るんじゃない。

……ないかな。嫌なこともあるけど……」

いったい、こいつは私をどこまで惑わせれば気が済むんだ。

一人で生きて、一人で死ぬ。

そう決めていたはずなのに、こいつが来ない事にて傷ついた自分と、こいつが来たことでほっとした自分がいた。

「余計なお世話」

依然外を見たまま呟く。相手に聞こえているかは知らない。

「また明日」

あいつはまた会うことを約束し教室を出た行った。

私はずっと一人で生きてきた。

これからもずっとそうして生きていくのだと思った。

私は変わるべきなのだろうか？

変わっていいのだろうか？

「……私も帰るか」

悩んでも答えは出ないだろうと机から降りる。
すると机から一冊の雑誌が落ちた。

初日に拾った雑誌。

何故か元の場所ではなく、自分の机に仕舞った雑誌。

もしかしたらこの雑誌が無ければ、あの日、あいつに出会うことは無かったかもしれない。

そう思うと、運命めいた——いや、因縁めいたモノを感じる。

私は雑誌を鞆に仕舞い教室を出た。

教室に入っても、本を読んでも彼女は居なかった。

いつも僕より先にきていた彼女が。

何かあったのだろうか？

もしかしたら僕が余計なことを言ったからかだろうか？

ホームルームが始まって目の前は空席。担任も出席を確認して、ようやく彼女の欠席に気がついたようだ。

彼女は、このクラスでは空気の様な存在だった。それは、おそらく彼女が望んだこと。

意識しなければ、そこにいることに誰も気づかない。だから、彼女が今いないことに誰もきづかない。

でも——それは今日までだ。

いつものようにホームルームをし、いつものように一日が始まる。

そう誰もが思っていた、予定調和を崩したのは——彼女だった。前の扉が音をたてて開かれ、一人の生徒が教室に現れる。

黒く長い髪をした彼女ではなく、ショートカットの彼女。

クラスの皆、担任さえも彼女が誰か分からなかったのか、誰もが呆気に取られていた。

それは、髪型だけでなく雰囲気さえ違っていたからだろう。

僕には、今まで空気だった彼女が色と形を得た様に感じた。
教室中の視線を一身に受ける彼女は、僕の席を横切り自分の席に着いた。

「よろしくね」

そう一言を残して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0835/>

一人の人生は楽しいか？

2011年10月6日10時45分発行